

「葉桜の緑」

本田 美徳 大阪府寝屋川市 六十一歳

「3・11」といつても分からない世代さえ増えた東日本大震災。戦後最大の国難とまでいわれた日から十二年の歳月が流れた。

昨春、警察官を定年退職した私は発災当時、関西から災害警備で東北地方に派遣され、宮城県のご遺体安置所でご遺族に寄り添う遺族支援という任務に従事していた。ご遺体の検視と納官、安置所で行う仮葬儀に立会う日々が続き、自分の人生観さえも変わった。

号泣、悲鳴、慟哭が渦巻く中、人命救助にはほど遠い悲しみだけが支配する任務だ。被疑者の逮捕や困っている人を助ける警察官特有の達成感とは無縁の任務だった。だが誠心誠意、遺族の皆様寄り添っていると私達へ御礼を述べてくれるのだ。「遠い所からお世話様です。」と。悲嘆の極地で何故、人は人に優しくなれるのだろうか。そんな気持ちでいた時、ある緑の色を見た事が忘れられない。

現地を離れた六月。バスの中から見えた東北の遅い桜。私が住む西日本では見られない六月の葉桜だ。花が散った後の葉だけれど、その一つひとつの小さな緑が眼に優しく映え、心に沁みだした。しなやかで鮮やかで。葉桜の緑には、すすくと育つ強い生命力がある。そして今なら分かる。あれが震災からの復興への新芽だったのだということ。だから今でも葉桜の緑を愛でると願うのだ。東北の真の復興を。